

座談会 大学院と学部 これも異文化コミュニケーションか?

榎木, 玲子 / 森村, 修 / 佐々木, 一恵 / 松本, 悟 / 奥石, 哲哉

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

異文化 : journal of intercultural communication : ibunka

(巻 / Volume)

18

(開始ページ / Start Page)

7

(終了ページ / End Page)

43

(発行年 / Year)

2017-04-01

特別企画

座談会

—— 大学院と学部これも異文化コミュニケーションか？

榎木 玲子先生 × 輿石 哲哉先生 × 松本 悟先生 × 佐々木 一恵先生 × 森村 修先生



森村

本日はお忙しい中、ご都合をつけていただきましてありがとうございました。

このたび、「異文化」の編集の企画の中で、メールでは既にお伝えしたように、学部と大学院の連携強化のために、学部の執行部の先生方と大学院の執行部の先生方の座談会を企画させていただきたく、先生たちにご連絡を差し上げました。

既に学部の企画の中で、国際文化情報学会等で院生と学部生が触れ合う瞬間はあります。また、実際には特定のゼミ、もしくは科目の中で大学院生と学部生が交わることはあったとしても、お互いの存在を親しく感じるという形ではない。教員の中でも、大学院担当の先生方と学部の先生方は、同じ教授会の学部の席につきいながら、当然学部教授会なものですから、議論はどうしても学部の業務問題、もしくは教育問題に特化されてしまう。また今度は大学院の教授会に行くと、今度は学部の先生方は当然担当ではないということから一緒に議論することがない。なので、同じ仲間同士が顔を合わせていても、日常的にはお話があっても、いわゆる大学院教育に対して学部の先生方のリアリティーというのがなかったりする部分もある。

私が研究科長をつとめていたぐらいまでは、大学院教授会をそのまま引き続きで学部教



森村 先生

授会の後にやった時代もあって、そうすると、大学院が始まると当然学部が始まると大学院の先生方は退席されるし、大学院の授会が始まるころには既に先生方はお疲れになっているということでも適当に抜けていかれて、授会が成立しないかどうかという時期もありました。十一、十二名そろえて、やつと授会を成り立たせるのに七、八名委任状が出ていけばいいかななどというのも苦労させられました。松本研究科長の時代になってからは、曜日を指定して、火曜日なるべく早い時間帯で始めるということが通例化して慣例化してきたというのはひとつの進歩です。そうなってくると、今度は学部と研究科が別組織みたいな形になりかねないのかなという危惧もちょっとあったりします。こうした教員間の問題も含めて学生たちにとっては大学院というのはもつと疎遠になりつつあるのか、もしくは大学院という組織というよりも、現実的にそこに大学院生がいるんだということがあるのに、同じ先生がもう少し専門にこだわったり、内容を少し変えたりしながら、大学院のアプローチを学部生にもちゃんと提供されないまま学部と大学院との関係がかわらずにきているのかなというのが私のこの十年、大学院にかかわってきたちよつとした観察です。

そのような中で二年間研究科長をやってきましたけれども、当時から含めて研究科修士の定員割れ問題もあつたので、学部生に大学院をもう少し意識してもらいたいということで、今回こういう企画を『異文化』の中で無理やり組ませていただきました。また、執行部の先生方にご協力をお願いできるように画策させていただきました。

メールで四点ほど先生方にご連絡を差し上げて、ポイントとしてこのようなことが議論できたらいいな、もしくはざつとばらんに、忌憚なきご意見をいただいて、ただ読者が学部生、院生だと意識していただいて、先生方のお言葉をナマで伝えて、メディアとしての『異文化』をある種の広報紙として活用していただきたい。私は編集三年目になりましたけれども、『異文化』のありかたをちよつと変えていきたいと思っています。特に私は紙ベースのメディアが好きなものですから、ウェブもいいかもしれないけれど、雑誌はもつと重要だと思っています。だから、できれば、なるべく手にとつて読んでもらえる、ごみ箱にぽんと捨てたり、もしくは本棚に入れて、引つ越すときに捨てられていくのは嫌だなと思っています。だから魅力のある——松本先生や佐々木先生からも十年もつような記事

にしていただければというメールもいただいておりますので——雑誌にしたい私も両先生と同じ気持ちでのぞんでいます。その上で今回の企画に関して先生方のご意見を伺えたらと思っています。ぜひよろしくお願いいたします。

まず第一点目は、大学院で先生方がどのようなことを経験されて、学部とは何が違った、もしくは何がおもしろかった、何がわからなかった、何が面倒くさかった等々、大学院をまず知らない学生たちに向けて、先生方の経験談を踏まえて自己紹介をお願いできればと思っています。

二つ目が、学部の教育からみて、大学院国際文化研究科に対してどのようなご要望があつて、どのような教育や制度があつたらあつたらと学生たちを勧めるのになとか、推薦できるのになという点があつたら仰ってください。榎木先生は現在、大学院をご担当されていないですけども、逆に大学院外からみえるもので構わないので、大学院教育に期待するものなどがあつたら、ぜひお伝えいただければと思っています。

三つ目は、今度は逆に、大学院側から学部生に対してこういうことができるんだよとか、こういうことは、さすがにできないんだよとか、そもそも大学院ってこういう場所だけど、もつと新しい二十一世紀型の大学院、自分たちが受けていた時代の大学院とはまた違った大学院のあり方であるかもしれないから、こんなことを考えていたり進めていきたいと思つているんだということを、大学院を担当されている先生、研究科長、副専攻主任の先生方から、大学院からみて学部生に対してメッセージなり、こんなこと、あんなことをお伝えできるようなお話をお願いしたいと思います。

四つ目が、重要な問題として、どうしたら学内の進学者だけじゃなく、学部の進学者を大学院に押し込めていき、大学院としてその出口へどうやって進めていくか、もしくは何人かの学生は学部を卒業し、就職して戻ってくる子たちもいる。代表的なのは、一期の生の月野楓子さんという個人名がとっさに出ますが、そうした人たちもいて、一回外に出たんだけど、もう少し勉強してみたいとか、マスターで出たが、博士号をとってみたいとか、研究職にもう一回復帰してみたいとか、戻ってくるような卒業生たちに対してでもいい。とにかく大学院っていうところだということを学部生に対して、もう少し情報をお伝えできたらなと思っています。その中で学部進学者に対しても、自分は学部を卒業していくけれども、大学院を視野に入れてもらつて、大学院の魅力というものがあるんだよということをそういう学生たちに伝えていきたいと思っています。

もう一つは、先ほどもちょっといいましたように、外国人留学生に対してのアプローチ。今、学部でも留学生の入試が始まりましたけれども、今後もう少しふえていくのか、どういう形になっていくのか、先のことを見越していくことは難しいかもしれません。留学生問題とか対策というとか何か嫌っている響きがあります。やはりそれなりの受け皿、日本語教育の問題等、大学院の現場でも相当ぶつかっています。修士論文を書かせるという段階で、そもそも日本語の問題にぶち当たってきている現実がある。それでは学部ではどうなのか、もしくはこれからはグローバル人材という問題も含めて、今度はこちら側が海外留学していくということも踏まえて、海外——今、海外という言い方は古いかもしれないですけども。国際文化学部を出た後、海外の会社なりNPO、NGOなりに就職したいという学生をある程度学部側が押し込んでいくという動きもあって、一期生から五期生ぐらいまでの間、私が国際交流センターまで言って就職説明会に参加して、お給料の問題であるとか、募集人数などの確認をしたりして、現場の人たちからお話を聞いてきたこともありました。当時は、担当の方から、給料は低いし、仕事はきついしという話ばかりもらっていた時代だった。

でも、海外で活躍できる人材を育てるという他大学、他学部でもやらなかったこととして国際文化が九九年に立ち上がって、二〇〇三年三月に卒業するときには、学生の就職先の一つとして考えてもらいたいという思いもあって、海外を視野に入れた学生たちを集めていこうと思っていたのもありました。私の印象ですが、最近はだんだん内向きといつては変ですが、三・一一があったり、IS（イラム国）があったりということが影響しているのかもしれないけれど、学生がなんとなくこちんまりとしてきた感じがみえてきて、ちよつと残念な部分もある。

留学してくる学生たちを迎える側と、留学させるといふか、外に押し出していくということ、中でも国際文化学部や研究科がそれらの学生にとってどういう位置づけになるかということについてご意見があったらいいなと思っています。大体こういう趣旨で二時間弱のあいだおつき合いただけたらと思います。よろしくお願いいたします。

では、早速第一点目から、順番も決めていないので、誰かが口火を切っていただければ。ご自身の経験で大学院その他のことについて。それでは、松本先生からお願いします。

松本 我々、やや異質な二人が来ていると思うんです。つまり、学部を出て、一般企業で働いたり、その後、私はNGOにいました。私

は十年に一度大学院に戻ってきていましたので、二十三で大学を出て、三十五で修士を終え、四十七で博士を書いている。十二年周期で大学院に戻ってきている。

そういう意味からいくと、今の一般的な学部生の進路の話には適切ではないかもしれませんが、私は大学時代、大学が大嫌いで、勉強は何の意味もないと思っていた人間が、なぜ大学院で勉強したのかという話になるかと思うんですけど、考えることが中心だったことに尽きると思います。学部ときは、正直いつて授業なんか出ないでも、教科書を読んでテストを受ければ単位はとれましたし、成績なんて何の意味もない時代でしたから、そういう意味では、大学時代はほとんど別のことをして過ごしましたが、大学院に来て本当にいいなと思ったのは、まず第一に、考えることが中心である。つまり、それはみんなで集まって、その場にいなきゃできないこと、自分一人で本を読んで何か解決ができるものではなかったという意味で大学院はすごいよかったなと思いますね。

二つ目は、集まってくる人たちです。私の学部時代を反省すれば、要するに単位のために来ているわけではないということです。みんなそこで学びたいことがある。学んで議論して、その結果が単位であり、最終的に学位につながる。そういう意味では、学びたい者たちが集まっているので、刺激を受けることができる、新しい発見も多いというのは大学院のすこいいいところかなと思いますね。

三つ目は、教員との距離です。学部ときは、私は教員をほとんど知らなかった。もちろん名前は知っていますが、気軽に声をかけられるような先生はただの一人もいませんでした。大学院に行けば、廊下ですれ違えば名前前で呼び合い、もちろん留学のときは特にそうですけれども、教員との距離が違い分、いろんな相談もできましたし、いろんな学びもできましたし、わからなかったら先生のところに行って、しつこいぐらい話を聞くことで自分の考えなり、知力なりもつきましましたから、そういう意味では、大学院というのは学部とは相当違うんじゃないかと思えます。

森村 ありがとうございます。では、佐々木先生、お願いいたします。

佐々木 松本先生のようなまとまった話ができなくて、どうしようかと思って、ではちょっとまねっこをして。

私も就職して、そして大学院に行ったんですけれども、私の場合は雇用機会均等法第一世代



松本先生

で、ようやく女性も男性と同じように働けるようになった、法律が通ったということで長期系の銀行に入ったのですが、そこで直面したのは、よくいわれる話ですけれども、法律が変わったからといって、企業文化が一夜で変わるわけではないということです。男性のお仕事、女性のお仕事と分かれたところに、男性のお仕事をする人が入ったよみみたいな。なので、では両方やってねということで、女性も二つの仕事をやるんで、大変でした。

そんな状況で、初めてこれって何と。男女平等雇用法が通って、それで入ってきたのに、法律って何の意味があったのということ、ちやうどそのころ、ジェンダーという言葉がまたに飛び交うようになっていて、「ジェンダー、これ何？」というのがあって、こういう考え方があるんだねというものをみていくうちに、松本先生と同じですけれども、これをちゃんと勉強してみようかなということでもう一回戻っていったわけなんで、だから、この二人は余り参考にならないかと。

それで、大学院に入って思ったのは、松本先生と同じように、先生との距離が近い、そして何もよりも学んだのは、周りとの切磋琢磨というか、同じ釜の飯を食うというか、お互いそういう感じで今に至るといえるか、運命共同体のような。今でもそんな感じで、家族ぐるみでつき合っているし、そんな状況でやっている。そういった人たちと一緒に育ってきたという本当にすごい強いきずなだし、いまだにお互いの知的刺激というか、自分が書いた論文とか、向こうが書いた論文を送ってきて、お互い色々いえる環境、あの人間関係、裸でお互いつきあってきたので、そういうのができる場が大学院だったかなという気がします。

あと、当時は今と大学院の位置づけが違って、大学院に行くのは、一般的なきらきら社会を一旦あきらめたというか、出家僧のような、私が行ったところは、博士一貫なので、みんな研究者になるんだという気概、意気込みで来ていた人たちばかりだったので、世捨て人がお互い勉強している。そこに先生が、自分たちの問いを投げかける。そうしてやっているうちに、先生ともプロレスになっちゃう。私の場合、海外にも留学して博士をとったんですけど、日本の大学院とは違ってました。

自分の研究というのがすごい重いんですが、私が留学したところなんかはシステムチックになっていて、歴史学者として、研究者として、そして教育者として、その両方で立っていけるような教育だったんで、教育者の育成みたいな部分も非常にトレーニングの中にあって、それはちよつと大きな違いです。でも、今の学生さんのためになる話は全然していませんけど、以上です。

佐々木　そうですね。だからそんな感じですね。

森　村　ありがとうございます。では、学部の先生、お願いします。榎木先生、お願いいたします。

榎　木　今お二人の話を聞いていて、ロマンチックだなと思いました。

　　というのは、私はもう少し現実的かつ即物的で、佐々木先生のお話にリンクさせると、私たちは均等法以前だったんです。ですので、学部を卒業した段階で、私は日本の企業に女性として働くことを全く考えていませんでした。既に、翻訳を始めていたので、それを進めたかったんですが、お師匠さんに、ひとり立ちして食べていくにはまだまだだと。それであれば、どこかに所属しておいたほうがいいと、これまた現実的なアドバイスを受けました。

　　学部の延長線上に大学院がありまして、私の学部と大学院はかなり密接に結びついていました。学部のころから大学院の先輩たちと一緒に読書会をしていたことで、比較的自然に修士へ上がり、修士に上がった段階で翻訳で自立できるかと思ったら、やっぱりできなくて、でも、そのころには研究におもしろみを感じていたので、博士に進むという形でした。

　　教員の多くは聖職者だったので、今から思うと環境としては少し特殊でした。ではどんな知的刺激があったかというと、学部のとくと変わらず、やはり先輩たちとの読書会がすごくおもしろかったです。学部のとくから博士の後期課程の方々と一緒に本を読んで、ああでもない、こうでもないというふうに話したりしていましたので、学部と大学院教育の断絶はそれほどなかったように思います。

　　学部も自由好き勝手にやりましたが、大学院でも自由好き勝手にやりましたし、総じて四年プラス二年プラス三年、計九年、学部のころも含めて楽しかったです。

松　本　　最後はロマンティサイズされましたね。

榎　木　　いや、全然ロマンチックじゃありません。おもしろかったというだけです。

森　村　　でも、おもしろかったということはいいことじゃないですか。

榎　木　　それ、ロマンティサイズってそんな極端じゃないでしょう（笑い）。

森　村　　ありがとうございます。では、興石先生。

興　石　　僕の場合は、もともとが田舎の出身で、小さいころから英語が好きで、洋楽が結構好きだった



佐々木先生

たんで、英語をやりたいなと思っただけなんですけど、英語が好きであつても、当時、番組もないし、FENなんて山梨は入らなかつたんです。そんなこともあつて、英語を勉強したいと思つていて、大学は英語を専門にやる場所を選びました。

ただ、僕が大学でおもしろかつたなと思うのは、今、学部長がおっしゃつたような読書会というのがあつて、目が開かれたということ、僕らの大学は先生がとても親身な先生で「興石おごつてやるよ」、なんてお呼びがかかつたりして、とにかくよくかわいがつてくれたんです。一年のころから、そういう形で研究室にお邪魔していたところもあつて、とても距離が近かつたと思うんです。でも、そのときは近かつたんですが、だんだん遠くなるんです。大学院に行くと、今までうんと近かつた先生が、こんなにすごい人なのかというのがわかつて怖くなつてくるということがありました。

大学はそんな感じだったんですけども、大学院で本当に自分の中心であつたのは、好きなことをやっていきたいと。一回しかない人生だとよくみんないうんですけれども、僕は本当に好きなことをやらせてもらつたほうだと思ふんです。だから、自分は英語が好きだったから英語でいこうと。ところが、英語が本当にできる仲間は、本当に数多くて参りました。でもおもしろいことに、そういう人たちは大体英語学をやらなくなる。僕なんかはたまたま続けていただけなんですけれども、大学院に入ることができた。大学院に入ったら、今度はおもしろいことに、他言語の先輩方とつき合うことが出てくる。そうすると、フランス語の人とか、ドイツ語の人とかと仲間になることで目が開かれていく。

大学院に行ったら、普通二年だけど、興石は八年ぐらいいてもらおうなんていわれて、実際随分いたんですけれども、途中で休学してアメリカの大学院に行きました。オハイオ州立大学というところだったんですけど、とてもおもしろくて、その先生がまたうんとよくて、僕をかわいがつてくれて、外国人に受けが良かったのかな、後で残つたらといわれたこともあつたんですけども、家庭の事情とかいろいろあつて、結局帰つてきて、日本で就職しました。

そのときに心残りに思つたのは、仲間はずつと向こうで、奨学金をもらつて、その後四年、五年いて、ドクターをもらつて帰つてくるのに、僕はそういうことができなかったということでした。いつか機会があつたらもう一回行こうと思つていたところ、勤務していた大学から、サバティカルをもらつてスコットランドで一年過ごし、そこでまた素晴らしい先生方との出会いがあり、結局、僕はその大学院生によわい四十でなるんです。

アメリカだと、学会とかで自分がこのように思っているというと、相手は違うと行って対決姿勢できちゃうんです。それがうんと怖かった。ところが、スコットランドはおもしろくて、自分がこういうふうに通うと話す、前から向って来るんじゃないかと、後ろと一緒にいて、サポートして、そうだね、でもこのようにしたらよくなるよというふうな、ある面、サポートしてくれながら、人文的な興味みたいなのを盛り上げてくれる雰囲気があった。そんなことがあって、結局スコットランドに十年間通ってドクターをとしました。そのときの先生が、これは本にしないとだめだといわれて、自分で売り込んで、いろいろなところにブックプロポーザルを出すなんてことをやったのですが、とてもよい経験になりました。

僕の場合、大学院というのは非常に自然な形で学部の延長にあつて、さらには好きなことをやれたと自分では思っています。

○森村

どうもありがとうございました。聞いていてうらやましいなと思ひまして、私はひどかったですよ。私は法政の学部の哲学科を出て、その後、東北大学という国立大学の大学院に行つたけれども、入ったそばから、おまえなんか来るんじゃないかというふうな受け入れ方をされた。東北大学は昔からあるけれども、私立大学の哲学科生でとつたのはおまえが初めてだということ、一カ月たつたら、私立大学というのは勉強しないのかと。私はドイツの哲学をやつたもんだから、ドイツ語がこんなに読めなくてよく大学をやつていなど。私の師匠に当たる先生が、語学は後からやればいいといつてくれたので、それが救いだつたですね。

なので、今、先生方のお話を聞いていて一番うらやましいのは、先生との距離が近いということ。大学、大学院、もしくは海外も含めて一度も近いと思つたことがない。学部するときも定年直前の偉い先生で。日本の帝国大学なのでという感じなので、大学院に行つて東北大学に進学したときも、基本的にのし状の席で、末席から学部三年生、四年生、M1、M2、D1、D2、D3、助手、非常勤講師、教授、助教授と並んで、上座に大教授の先生と客員の先生がいて、お酌をして回る。だから先生の顔をみるのも怖いし、授業で指されて、ドイツ語をチェックされ、フランス語を文句いられると、もう萎縮して、半分泣きながら予習して、ドイツ語のテキストとかフランス語のテキストを読んで、当たつて、こんなこともできないのか、どうしておまえみたいなやつがいるんだというオーラがどんどん来る中で……



榎木 先生



興石 先生

松本 これ、大学院に学生をふやそうという企画でしたよね（笑い）。

森村 すみません、陰惨な過去を思い出した。

松本 もう来ないほうがいいよみたいな企画かと一瞬思っただんですけど（笑い）。

森村 だから、うらやましいなと思って……すみませんでした。話がずれちゃった。

榎木 今は変わっているから。

興石 そう、今は違っていると思います。

森村 今は違っただですよという話の前に、昔話すごいうらやましいなと思って。

榎木 私は距離がありましたよ。

森村 世代が近いから。

松本 博士のときなんて、自分の教員が本を出すんで、そのドラフトを学生たちに読ませてコメントをもらって、それを全部ちゃんと聞いて、なるほどそういうことがあるかといって、先生が学生に自分のドラフトを配って、コメントさせて、それを反映させて本にしてくれて、謝辞に学生の名前を書くんですよ。それは個別に違いがあるし、それを……

森村 すばらしいですよ。辞典をつくるから項目を選べというところ、いろんな本から項目だけ選んで、バイト代は本一冊（笑い）。

松本 僕もまねしてやっていますよ。本の一章を書くときには、うちの学部でゼミ生に渡して、みんなでたたき合ってもらって。

森村 俺も三十年後に院生になればよかった（笑い）。すみません。話の趣旨がずれちゃいました。戻します。学生との距離を確保しようと思って私はやっているつもりだったんですけど。どうもありがとございました。愚痴になる前にテーマを変えていきたいと思いません。

今、先生方が教員との距離という話があったり、私も読書会というのはすごくいいなと思っていて、一番勉強したのは、そして一番修行させていただいたのは、当時の助手という制度と、ドクターとか非常勤の先生たちが自分たちのために、そうやっていろんな形で研究を手助けしてくれる、論文を書くのがある程度サポートしてくれる。どちらかというと、院生の文化みたいなものが、大学院ですごくいいものがあるんじゃないかと私はどこかで思っていて、いつとき、国際文化ができる前にいろんなところにかかわった

ので、何とか院生同士が専攻室の中で、読書会でもいいから同じテーマで何か勉強会を何とかというのを誰か企画して、動き始めたらいいなと思って幾つか仕掛けたんですけど、やはりなかなか時間が合わないとか。国際文化のいいところと悪いところであるテーマの広さというか、専門性という問題を二つ目のテーマの、研究の大学院というと、先ほどのお話の中にあつたような、何となく研究者養成というところから、佐々木先生のお話にも少しあつた、だんだん教育者、その後に出てくるのは、博士から出てからになっちゃうかもしれないが、自分の専門性じゃなく、もう少し別の角度みたいなもの。いろんな人たちと出会っていく中で、いろんな専門の先生がいらつしやる学部、もしくは大学院へと行く中で、もう少しこうしたら学部側から——先生は皆さん学部の先生でもいらつしやるので、大学院にこういう形でもつていけばおもしろくなるのになとか、学部のこういう授業をもう少しうまく使いながら、大学院なり研究に仕向けていけたらいいなとか、ご自身の学部教育という立場から大学院に期待するものという話をお話しただけならと思ふんです。では、今度は学部の先生から何か。では、輿石先生から。

輿石 学部の教育というのは、これは最小限マスターしてほしいというのをもうちょっと明確にするようなことがあつてもいいのかなと思ふんです。うちも教職の資格を出しているんだけど、それには例えば発音記号みたいなのは知っていたほうがいいと僕も思うんです。でも、学部だと学生によつては三年次までやっていないことが結構あるんです。ですから、これだけは知っておいてほしいとか、そういったことを明確にしていく中で、自分の興味が出てくれば、その後続けられるようにしていくことなのかなと思ふは思っています。

森村 では、榎木先生、お願いいたします。

榎木 この中で、唯一私だけ大学院とかかわりを直接的にはもっていないんで、その立場からいいますと、見える化をもつていただければと思ふんです。教員でさえも、大学院で何が起きているのか全くわかりません。そうすると、学部生はなおのこと、わからないのではないのでしょうか。ですので、もう少し見えるような形で、パンフレットや、ネットなどを活用して、もつと具体性をもつた形で伝えるようにしてはどうかと、ずっと思っていました。

そのいい機会となるのが国際文化情報学会で、二年ぐらい前か、学会を開く段階から大学院と学部の学生たちが一緒になって企画立案するようになりました。さらに学会の実施のところでももつと交わりがあつていいのですが、なかなか笛吹けどもということ

があるのかなと。なので、まずは見えていくと、もつと興味はかき立てられるような気がします。

森村 ちよつと変な話ですけど、教員の先生方で大学院をもちたがらない先生がいらつしやるやに伺っている部分もあって、そのときにみえている先生方は、大学院はちよつとというその辺の何かつてあるんでしようかね。つまり、私も研究科をやっているながら、学生たちにどうアプローチすればいいのか、何をこちら側に求められているかわからないときがある。見せればちゃんと反応してくださるのか、何か欲しいものを提供すればこちら側をちゃんとみてくれるのかなという。

榎木 見せる化、見える化というのは、まずは初めの一歩でしょうね。それがなければなかなか始まらないというところはあるかと思うんです。では、その先どうするかというのは、一歩ずつ進めていくしかないような気がします。

森村 ありがとうございます。では、佐々木先生。

佐々木 学生の話を知っていると、卒論を書いた段階になって、ああ、もうちよつと勉強したかったと卒業する前にいう。もちろん大方の理由は金銭的な理由です。これだけ学費を出してもらって、この先、大学院なんてとてもいえないと。

例えばですけれども、制度としては五年制があるわけで、一回卒論を書いて、それをもう一段階高めた修論にしていくといったものも学生にみせていけば、あと二年授業料、しかも大学院に行くと安い。それを払えば、自分がちよつともやもやとしたものを解決して、修士を出て、就職活動するというルートもみせていけるんじゃないかなと思いました。

それは卒論を書いて初めてわかることなので、学部の中で卒論が必修だった時代があつたんですけれども、それが一旦停止になって、卒論がどれぐらいの数書かれているかというところにもよると思うんですけれども……

榎木 卒論必修の時代があつたんだっけ。

森村 あります。一年だけ。

榎木 何年。

森村 一期生の一年だけです。二期生、二〇〇三年度から一教（第一教養部・国際文化学部の前身）の先生方が入ってきて、それでカリキュラム改革を起こしてしまったので。

輿石 そのときは何か理由があつて？

佐々木 改編だから。

卒論を書く学生をふやすのも一つのつなげていくところで、もちろん映像とか美術とかありますので、必修化というのは非常に難しいと思いますけど、卒業研究を何らかの形で出していく数をふやせば、少しつながってくるかなという気はしますというのが感想です。

森村 ありがとうございます。今のは大きい問題なので、また時間をとりたいと思います。松本先生、お願いいたします。

松本 この質問ってそれが狙いだっただけ？

森村 そうです。

松本 自身が学部有的时候に大学院を全く考えていなかったもので、考えられなかった人間からいくと、基本的には大学院はみんな行くところではないと思っっているんです。つまり、私たちの国際文化研究科だって定員十五人ですから、そもそも二八〇人ぐらいいる学部生の中で、もちろん十五人を全部それで埋めるはずもなく、それを考えれば、一握りの人たちのためのものであることは確かだと思います。そこは向き不向きからいけば、そんなに大学院に行く必要のない人たちが大層を占める、これはまず大前提だと思うんです。ですから、一番重要なのは、大学院に行ったらもつと意味があつたかもしれない人たちがもし行っていないとするならば、そこは考えなきゃいけないことだと思うんです。

そうすると、例えば私のゼミであれば、もちろん全員必ず書きでやりますし、私は自分の授業でも、今度説明会があつて、大学院とはこういうところで、こういうことを考えている人は大学院に行くことを検討ぐらいはしてみてもいいんじゃないのというのをやるんです。誰がこの情報を必要としているのかわかりませんが、さつき榎木先生が話してくださったように、まずはアウトリーチというか存在そのものを伝え、そこへ行くと何ができるのか、しかもそれも多様ですので、先ほど我々の世代で、学部から大学院に上がった先生方が考えている大学院と現在の大学院はおおよそ違いますし、私も興石先生と同じで四十近くになって日本の博士課程に came したから、二〇〇四年のときからさらに七年いましたから、日本の大学院って全然違うと思います。ですから、今の大学院の姿や役割を学部生の人たちにちゃんと伝えることがとても大事なことでと思いますし、できるところから始めるとなれば、大学院を出ていろいろ考えられた先生方で、ゼミで卒論をなるべく課している先生方からでもいいと思うので、その先生方が大学院を語って

いただくことは一つ大きいと思いますし、重要なことかなと思います。

もちろん知らせるということはちゃんとしなきゃいけないので、研究科長という立場からいくと、学部生に、こういうところだから来てみたらという研究科である必要があります。私は来てまだ五年しかたっていないんですけど、内容を何とかちゃんとした修士論文の作成までの過程を胸を張っていえるものにするのが我々研究科にいる側の仕事だと思います。だから、アウトリーチしにくいのは、実はちょっと自信がないからじゃないかなと思うんです。本当に心から自分たちが所属している研究科を学部生にお勧めできるかどうかという——これ、「異文化」に書けるかどうか知りませんが、その悩みがあるからこそ、きつとアウトリーチが難しいんですね。ただいっただけなのにできないというのは、多分そこどころだと思っんで、本質的には研究科の研究の質なり学びの質を高めることが、我々の口から研究科においてよということをつくると思っんで、研究科にいる側からすると、やはり基本的なところをやらないとまずいのかなと思います。

佐々木 今回、田島さんの博士論文を審査させてもらって、こんな論文も書ける大学院なんだと思ってちょっと自信がきました。

森村 今、松本先生がいわれたことが大学院側からのある一つの真実かもしれないと思っっていて、人数が少ないからがちりできるかという、そうでもなくてというのが現実にあつて、たまたま田島さんの名前が出たので、ここにタイムキーパーとしてもらつたのも、彼女の場合、二〇〇八年にマスターに入つてきて、外部進学者だつたんですけれども、休学一年挟んで七年在籍して、今回うまく博士をとれば卒業になります。旧世代の院生たちもみながら、自分の過ごしてきた時間の中で、大学院の内容も随分変わってきたのを目撃したり、先生方がいるような形でかわられているのを見てきています。松本先生や佐々木先生がいわれたように、自分も研究科長をやっているから、内心じくじたるものとして、いつては悪いんですけれども、もうちょっと何かできるんじゃないか、できたんじゃないか、やるべきじゃないか、もしくは大学院と学部とどう差異化していかなくちゃいけないと同時に、でもやっぱり学部の下支えがないと大学院って立っていかないよねという中で、そうすると、それこそこれは録音できるかどうか際どい話をする、ある種、学部生のほうが質が高い。

榎木 ただ、それは一般論として、ここの学部だけではないように思っんです。方々から聞きます。つまり、学部で優秀な学生は就職する。

松本 それは昔からそうじゃない。

榎木 分野によって違うかもしれないですけどね。

松本 早稲田大学は少なくともそういわれていた。

佐々木 法律とかそういうところはそうだと。

森村 法律はそうです。東北大学に入ったとき、法律は助手が大学院に残る人がいないので、みんな司法書士になったり、公務員になっちゃったりするんで。

榎木 多分、実務的な……。文学ですと、社会で全く役に立たない——実は立つんですけどね。

森村 哲学は立たない。そういう話じゃなくて……。 (笑い)

榎木 無用の用という、それがなくなったらもう危ないですよ。ですけども、文学系ですと、本当に優秀な人は大学院に行きました。

松本 私、経済ですからね。

森村 だから、ここは難しいですよ。哲学科は変人しか残らない。社会でも犯罪者かそういう水準の人間か……。 (笑い)。

榎木 国際文化はどうなんでしょうね。

森村 そこがわからないので、余り一般化できないところなんです。

松本 要するに、純粹に人文社会と言いつれもない部分もあると思うんです。両方いると思いますよ。

森村 先ほど松本先生がいわれるように、いろんな切り込み方があっていいのねという部分も考えれば、必ずしも全員に声をかける必要

はないというのが真実だろうと思うんです。だけど、その子たちに情報が届かないのはまずいだろうというのがあって、うちのゼミ生から大学院に行きたいんだけど。その本人は教職を目指していたので、教員採用試験を受ければ教員になるんだけど、ただ教員になるのか、それとも大学院に行つて、もうちょっと勉強してから教員になるのかと。彼は結局東京の教員採用試験に受かつて、いつまでに答えなきゃいけないんだけど、どうしましょう。どうするのという話をしたときに、大学院に行つてみたい。夏合宿の前段階で、私に大学院つてどういうところですかと聞いてきたのです。そこから、大学院に夜間通いながら私立の高校、都立とか公立の教員になるのではなくて、その高校のもっている何かにひかれて、その教員になりたい。そのためにも学部卒でなるよりも院卒でなつて、少し勉強して、英語のほうで行きたいと聞きました。また夏合宿のときに、まだ迷っていますという話になつて、この

間の卒論を出す直前にどうするのっていったら、教員採用をやめました。ちょっと冒険で怖いんですけど、今度大学院の説明会に行つて、話を聞いてきて、高校は来年度の四月から非常勤でやるということだけは確保したので、無職にはならないで済みますといつていました。その足でそのまま大学院にさえ受ければ、大学院生になっていく、二足のわらじみたいなものをちよつとやってみるんだと。

なるほどなと思いつつながら、そういう子たちに、大学院つてどういうところなんですかって最初に聞かれたときに、ずっと大学院の授業があるんだよとか、大学院でゼミがあるんだよといつても、本人がそこにアンテナがないと、大学院つて興味ない。聞かえてはいても、自分が大学院を考えようかなと思つたときに、やつと効果的な電波として届いてくる。山梨でもFENが聞けるぐらいにはなつてくるみたいレベルで、受ける側がそういうレセプターをもっていると受信するのか、こちら側が声を大きくすると聞こえてくるのが、ノイズから少しは分節化して聞かえてくるのか、ちよつとそこがわからないかなと思つた部分もあつて、うちのゼミ生のお話をさせていただきました。

先ほどの松本先生のお話の続きで、今度は大学院でという話の、まさに大学院の授業や研究の質、修論の質を上げていくということの中で、三つ目のお話につなげていきたいと思つていて、今の大学院もそうだし、先ほどの松本先生のお話からすると、これからどうするという大学院の話があるはずだろうと思つていて、まず大学院つてどんな場所という言い方は中途半端だったんですけれども、先ほど佐々木先生のお話にあつたように、大学院がある種の教育もそこに行つて、例えば田島さんの話が先ほど出しましたが、この三月までは院生だったけれども、四月から学部非常勤になります。つまり一週間、二週間の間にがらつと立場が切りかわるわけですよね。そうすると、私は彼女に徹底的に博士論文指導はしてきたけど、教育指導はしていないわけです。

そうすると、教育者としての田島先生は、どういう形で先生になっていくのかなという部分も大学院の場でどこまでできるのか、しなければいけなかつたのかということも含めると、もちろん修士で就職されていく方もいますけれども。先ほどの私のゼミ生みたいに高校の先生によるので、ある種、教育者になっていくこととなると、修士の段階で教員免許とれますよといつても、その中には別段授業の仕方であるとかというのは教えない。もちろん、教育実習に行くからというものもあります。学部の実習ではなくて、大学院の中で教育者になっていく子たちも少ないけれどもいる、もしくは研究者になる人もいれば、修士で卒業して普通に仕事される方もいるし、博士まで行つたけど、博士号をとらずに仕事に戻られる人たちもいる中で、大学院つて何ができて、何ができないのか、そ

して大学院の教員として何ができて、何ができないのか、もしくはご担当ではない榎木先生のような場合において、何をしてもらいたい、もしくは何ができたらもつと大学院つて学部生に対してもつとプロモーションできるのかみたいなお話をいただけたらと、三つ目のほうに議論を移させていただきたいんですけれども。

今度はランダムにいききたいと思いますが、佐々木先生から。

佐々木 うちのような研究科は、分野がばらばらなので、これもできますよ、教職もやりますよ、こういうキャリアパスの人もできますよとかたくさんやっちゃうと、何でもありで崩壊してしまうんじゃないかというか。何でもできますよといっちゃうと、何か特色がなくなってしまうような気もしていて、いろいろな意見が分かれるところだとは思っています。

先ほど松本先生もいったように、学術としての質のある修士論文をちゃんと書いて出ていくところだよ、そこを外したらもう何も無い——何もないといっちゃうと語弊があるんだけど、分野が情報だったり、文学だったり、国際○○だったりするわけで、ただでさえ分野が多岐なところで、目的まで多様化しちゃうと本当に收拾がつかなくなっちゃうので、ある程度のレベルのある修士論文、レベルのある博士論文を書くところなんだと、それは私も声をかけた学生にはいつています。先輩たちが卒論を書いてすごいと思っっているでしょう。あれをもう一段階、二倍の字数でしっかり学術的なものを書いて出ていくところなのよという説明をします。

いろいろなご意見があると思うんですけど、私自身はきちつとした研究論文を書いて出るところとは考えています。個人的な意見として。

森村 ありがとうございます。では、興石先生。

興石 個人的には二点あります。まず一点目は、大学院というのは、徹底的に考えて、読んで、書くということをやる場所ではないかということ。二点目は、大学院は学生個人の研究をまず優先して考えていくところだということだと思います。どうしても学部だと、ゼミでも個人の卒論になかなかつながらないことが多く、学生もクラブの乗りでグループワークをするのがみんな大好きなんです。何かもたれ合っているようなところがあるのですが、むしろそうではなくて、個人で、自分一人で立っていくんだというようなところが大学院なのかなと思います。

先ほどの一点目についてですが、考えて読み書きというのよりも、国際系の学部というのは、どうしてもプレゼンの能力の方を重視してしまう傾向にあるように思います。ところが、大学院というのは、そうではなくて、考えて読み書きをしていくんだというところが、ある面、学部から大学院に行けないところなのかなと思うんですよ。

SAに行つて帰ってきた学生が、普通に話すとか聞くとか、そこら辺はいんだけれども、いざ難しいものを書いたり読ませるときになると、えっということが結構あることを最近経験しちゃっているんで、その辺、学部から大学院を考えて、何かそのブリッジをやつていくこともあるのかなと思います。

森村 ありがとうございます。榎木先生、どうですか。

榎木 大学院進学を視野に入れているというのは、国際文化の大学院を視野に入れているということなのか、一般的に大学院進学をということなのかしら。

森村 基本的には一般的な話をお願いしたいと考えたので、あえてここは国際文化研究科としていない。ほかは国際文化研究科にしたんですけど、大学院をここじゃなくてもいいと思つているし、他の研究科でもいいと思つているし、他大学はもちろん、外国でもいいと思つていて、先ほどの私のゼミ生みたいな話をあえてしたのは、うちの大学院ではなくて、他大学なんだけど、私自身が自分の学部でそのまま行つたわけではなかったたので、そういうのはもつと普通にあつてもいいと思つているんです。だから、田島さんのようにほかの大学から来てもいいと思つていて、そうしたときに、大学院というのは、就職以外にも勉強できるし、海外であつて、やりたいことがあるんだつたら、この先生のところにつきたいから、そのためにドイツ語を習つてもいいんじゃないかぐらいに思つています。大学院つて何という、全く興味の学部生も含めたので、大学院進学を国際文化と限定していなくて、もうちょっと広く考えています。

榎木 具体的にお答えするしかないと思うんですけども、例えばそのようなやりとりをする場面は主にゼミの場になると思うんです。自分のゼミ生には実際にここ数年、大学院進学者がいるんですけども、ただアクセルを踏むだけじゃなくて、ブレーキも大事だと思つています。というのは、例えばアメリカ文化研究ですとか、アメリカ文学研究を追求しようとして大学院に進んだその先に何かがあるのか。ですから、無責任にそれをあおつてはいけなさと常に思つています。

一方で、本当に学ぶことが好きで、ぜひ進学をしたいという学生たちには、なるべく具体的に情報を集めて、どのような大学院で、どういう先生がいらつしやって、どのような卒業生がいて、就職はどうなっているかということまで把握して、その覚悟の上で飛び込むといいよはいつています。なので、アクセルとブレーキの使い分けは、ゼミ生にそのような話をもってこられたときには気をつけるようにしています。やっぱり、ある程度一生がかかっていますからね。

森村 私、その辺は無責任だな(笑)。

榎木 かつて私も行け行けどんどんだったんです。これから少し景気がよくなっていくとどうなるかわかりませんが、やっぱり幸せな人生を送ってもらいたいですからね。決めるのは自分だよということは大前提にしています。

森村 それはそうですね。じゃ、松本先生、お願いします。

松本 さらに学びを深めたいという人は大学院が適切であることはいわずもがなだと思いますが、もう一つは、学び直したい人だと思えます。このとき、例えばうちの国際文化学部をみると、二年までS Aがあつて、三年生になつてゼミが始まつて、ようやく学ぶとはどういうことかということに真剣に向き合うようになって、でも一年もたたないうちに就活が始まる。つまり、今の国際文化学部の学びのサイクルを考えると、ある意味何かを学ぶにはやや中途半端に切れている。S Aのよさもあるけれども、S Aが二つを分断している可能性もある。S Aのよさも考えれば、それを通じて、先ほど佐々木先生の話もあつたけれども、もう少し学びたいというか、ちよつと足りなかつたというか、消化不良に終わったという人たちにとっては、やっぱり大学院は一つあり得る。そのあり得る理由は、昔に比べて大学院に行つたからといつて、その後の就職が不利になるわけではないといふことが大きいと思つて。かつては、そこで二年食つてしまつたら、逆に就活が不利になつたわけですが、今どき、学部卒も大学院卒も一緒に採用したり、あるいは別の枠をとつたり、就職の不利は昔と比べれば少ないので、だとすれば、もう少し学んでおきたい、学び直したいという人も含めて大学院という場を使つたらいいんじゃないかなと思います。ですから、そういう人たちにとっては一つあり得るかなと。

もう一つは、一部の業種、本当に限られた職種では、就職先の条件としてプラスにもなるということです。それはもちろん大学とかの教員職になる人もそうだし、国際N G Oで勤めたい、あるいは国際機関に行きたい、そういう本当に限られた層の人たちかもしれないけれども、そういう人たちにとっては、修士課程まで出ていなければ、そもそもスタートラインに立てませんので、最初の二

つは非常に実利的なところも含めていいと思いますと、そういう業種があるということをまず知っておいてほしい。そういう人たちは早目にとってしまったほうがいいんじゃないかとは思っています。

三つ目は、私自身が仕事をし、大学院に戻り、仕事をし、大学院に戻りということをやってきて、うちのゼミ生に論文の力を信じろとよくいいます。つまり、私が何かを教えるのではなくて、ある水準の論文を書くという作業そのものが一人一人に与える力は必ずある。それは指導力とまた関係のない、論文がもっている力なので、論文の力つて、実は社会人になっても役に立つ力が結構ある。企業に勤めて働いた人間からすれば、物を見る見方、問いの持ち方、はつきりいつてしまえば、誰かの意見を右から左に動かすのではなくて、そこから自分の考えを生み出すということの力、こういう力つて、社会人というか、普通の企業なり団体なり政府に勤めていて、絶対必要な力なんです。真剣に論文を書けば、この力はつくと思っています。ですから、研究と働くとは違うかのように思うかもしれませんが、両方やった人間からすれば、同じ力がつくと思っんです。

同じ力がつかないということは、ちゃんと研究をしていないということなんで、それを信じて自分の力を高めるために大学院に行ったらいいと思います。

卒論のときにも私は学生にそういうんですけれども、大学院の修士論文のほうがより分量も多いですし、高度になりますから、求められる力はまだ一段階高くなりますので、そういうのにチャンネルジをしたいという人は、ぜひやってきたらいいと思いますし、三つ目の場合は、修士号という資格のためというよりは、むしろもつと本質的な力がつくと思っています。

これは教育者の側の流儀の違いですけど、私は奥石先生とは違って、大学院にも個人戦と団体戦があると思っっています。最後に論文を書き上げる力は個人戦であることは確かなんですけど、アイデアというのはずっと本に向き合ったり、風呂場で考えているだけでは浮かばなくて、議論をし、仲間がいて、自分の書いたものをたたいてくれる人がいて、たたくのも信頼関係によつてたき合うことによつて我々はアイデアをつかみ取るんだと思っっているので、やっぱり団体戦は必ず必要だし、団体戦なく個人戦でやると、みんな自分の世界に入り込んで、いいアイデアも浮かんでこないと思っます。でも、最後に書くのは個人戦であることは確かですから、大学院も個人戦と団体戦がある。個人戦だと思ってやると、みんな自分を追い込んでしまつて書けなくなつたり、あるいは嫌になつていってしまうと思っので、大学院というのはそういうところだと思っ。

そうでないところという意味で一つ確実に私も思うかなというのは、私も特定の分野ではない大学院、地理学というやらたわけのわからない、自然地理も人文地理の人たちもいるシドニー大学が修士で、博士も東大の新領域という一体何をしているのというところでしたから、そういうところについてすごく思うのは、新たな学問を修得するにはかなりな努力が必要だということです。つまり、三年生になつたら経済学をもっと勉強しておけばよかったなという人が、大学院でほとんどやっていない経済学を学んで、経済学の修士号をとろうなんて思うのはやめておいたほうがいいんじゃないかと私は思います。非常に古典的なディシプリンに大学院からチャレンジをするのは相当の努力がないとできないので、学び直しの仕方としても、それは相当大変ですよということ——できないとはいいません。ただし、それ相当の努力が必要だということだけは確かなので、余りそういうことを期待し過ぎないほうがいいんじゃないかなと思います。

佐々木

論文を書くことって、社会に出て役に立たないと思ってる学生が多いんだけども、そんなことは全然ないと本当にいえる。私も卒論とか書かせるときにいうのは、卒業論文って二万字あって、彼らにとってみれば非常に大変なプロセスだけど、ある意味、究極のコミュニケーション能力の高さをつけていく筋トレだといっています。しゃべっているときには、反応をみながら言い直しか、あの人はわかっていないなどといって別の言葉を使ったりとか、そういったコミュニケーションはとれるが、論文というのは、不特定多数の読者に向けて、自分が思っていることを確実に伝えていくという、そして自分が思っていることを論理的に確実に伝えていくという非常に極めて高度なコミュニケーション能力が養成されるわけで、それをあなたたちはこの二万字の中でやりなさい、これは社会に出て、後から書いてよかったと必ず思うはずだといっておかせています。

松本

卒業生はみんないます。

佐々木

いいです。書いている最中は、二万字というのは厳しい。何のためにこんなことをやっているんだみたいに思ったけれども、ゼミ同窓会のように、やっぱり書いてよかったですというわけで、社会と全く関係のないことをやっているわけではなく、そして卒業論文の上に修士論文を出せるというのは、ある意味、専門職業人のレベルですよ。それが特に国際関係のお仕事とかで要求されてくる。

私の学生で修士に来た子も、やはり出版業界に勤めたかった。なので、修士をもっているのと強いということで、確かに出版社に行つたんですけど、ここの同僚がベトナムに出版社を立てて、引き抜かれて、彼女は今、ベトナムの出版社でやっているの、先生、やつ

ぱり院へ行つてよかつたよと。そういったこともあるので、論文を書く力、さらに高度な論文を書く力というのは、私も松本先生と一緒に、大学院で譲れないところだと思います。

森村　そうですね。そもそも誰かに読んでもらわなきゃいけないわけだから、他者を想定しないと書けないのが基本じゃないですか。タコ壺に入つて自分の世界だけで、何をいつているか呪文を唱えているだけじゃ誰も論文を読んでももらえないから……

佐々木　通じないものを書いてでもだめだよと違って、それで何回も書き直させる。

輿石　それが多分パブリケーションという意味だと思っんです。日本だと出版というふうにいっちゃうけれども、「公になる、自分をさらす」ということだと思っ。個人ということでは、僕は松本さんと考え方は違つていないと思っんです。確かにその中ではいろいろやりとりがあるけど、最後は自分ひとり立つて研究の成果を公にしていくことが大切だと思っんです。

森村　究極のコミュニケーションというのは、皆さん、プレゼン力みたいな話がどこかであつたりして、その場で五分、十分話してぱつとパワーポイントを使つて説明して、それでうまく発表できればオーケーみたいな。逆に、書いて、本を読んで、書いて、また先生にたたかれて、また書き直させられて、日本語を直されて、こんなことをやつて何の意味があるんだと思っけれども、実はそつちのほうがじわじわ効いてくるような感じがあつて……

佐々木　最後に合同発表会をやるんですけど、そのときは卒論を書いた後のほうが、学会でやつたときよりも数段よくなつています。如実に差があるので、プレゼン力も卒論を一本書き終つてやると、そこは全然違います。

森村　うちもゼミ合宿を卒業式前の二月にやるんですけども、そこでゼミ論と卒論、三年生と四年生と結局バトルロワイヤルをやらせないで、三年生が書き方とかを学ばない。三年生に批判される四年生もあれだけど、四年生は常に建設的な意見を三年生に言う。もちろん、去年は自分が先輩にやつてきたが、今度は自分がやられる側になる。それをある程度経験すると、四年生の卒論が少し読めるようになってくる。

三年は四年に遠慮し、四年は三年だからといって手を抜くみたいなものはないです。外へ出しちゃつたら一年の違いも二年の違いでも関係なくなります。十年の違いでもたたかなきゃいけないから、そうなつてきたときに、どっちがきちんとしたものを考えているかということが書き物にはちゃんと残つてしまう。そうしたことを、卒論の必修化という話もあつたときに、指導と考えるから

大変なのかもしれないけれども、本人にどうやってうまく書かせるかというのは、必ずしも指導なのかなといつも思っています。

今回も博論を彼女に書かせましたけど、毎回すぐさま添削して返す。こうやって直せというと、これをずっとためておいて、自分の言葉にしないと自分の論文にならないので、私が直したものをそのまま転写したって意味がない。これは森村先生の言葉だから、私の言葉に翻訳しなければいけないと思って、また翻訳したもので意味が通じないとかいいながらまた返しますけど、そうしたことで他者が読むということが、本人が気づかないでどれだけ実力がつくか、もしくはちゃんとした言葉で物を考えることができるかということの訓練にはなっている。そうしたものが本来は卒論でもできるはずだし、本当は手間がかかってもというよりも、それをどう手間だと思わないかだろうと思うんです。

佐々木 手間っていったら物すごいですよ。ことしも紅白を聞きながら直した(笑い)。

松本 森村先生のところもそうだと思うんですけど、うちも院生と学部生と一緒にゼミをやったりするわけです。これはすごい重要で、三年生と修士二年(M2)がいるわけです。M2が書いたものを三年がたたくわけです。つまり、これをいつているのかわからないですよ。さっきのアウトリーチの話でもあるんですけど、要するにそういうことを通じて、大学院生というのは毎週のようにリアルに存在している。ただ一方で、だからこそ偏っていく可能性があるわけです。例えば、森村先生のところだったり、うちであったりとか、そこはもしかしたらコンスタントに大学院生が生まれるけれども、そうでないゼミとの間でギャップが生まれるというのも、それでいいギャップもあれば、余りよくないギャップもあって、それはすごい気にしているところではあるので、私は一教員として今いますけれども、大学院の研究科長としてもいなきやいけないので、それがどういう経験なのか。つまり、こうしたほうがいいじゃなくて、まずはそうやっているとどういうことが起きるのかとか、学部生にとってどんなプラスなのか。院生にとってもプラスなんだからやってみましょうかとか、そういう経験共有ですよ。見える化とさっき榎木先生がおっしゃったような、うまくいきかけているものがあるとするれば、もう少し出していくというのが大事だと思うんです。

森村 うちの話になっちゃってあれなんですけど、前はタイガーマスクというマンガの「虎の穴」みたいにきびしいというようなことをいわれていたので、古い世代になっちゃう。

榎木 それ、昭和だから(笑い)。

森村

だから、森村ゼミは図書館か、B T三階がまだスタディールームだったときに、いつもいるという話になって、「友達たちが帰るそばから、みんなして議論しているのをみて、こちらはかわいそうに思われているんじゃないか」という話があって、また森村先生に残されているんだみたいな。「やめておけ、俺が残しているようにみえるから、早く帰りなさいね」と言っていたことがあって、「別に好きで残っているからいいじゃないですか」と、「いやいや困るんだよ、俺の人气が下がるから」という話をしたことがあったんです。でも、本人たちが好きで調べて残って、図書館なんかで本を十冊ぐらい借りてきて、皆さんで読み回しながら、こいつの書いていることと、こいつの書いていることと違うことをいって、先生、どっちが正しいんでしょとかみたいなのがあって、同じ内容で調べても書き手によって違ったりするから、自分たちが好きなほうを選べばいいだろうみたいな話を……。

だけど、そうやっていくうちに、自分たちもどの本が読み得るに値する本なのか、これは読んでも「本当に？」というような本もみつげてくるので、逆に自分が書くようになれば、本の目利きができるようになるのかもしれないとか、自分とシンクロするような思考をするような書き手の人を見つけることができるようになるかもしれないとか、こういうことが問題意識の中に芽生えれば、自分ももう少し別な角度を考えようかなとか、少し頭の別な部分が動き始めるといいのかなと、今の話を伺いながら勝手に思ったりもしました。どうもありがとうございました。

だんだん時間もあれなんですけれども、一番最後の最大の問題で、今回の企画の肝はここをどうしようかという研究科問題としては出てきている、今度は直結、リアルに学部生をどうやって大学院に。先ほどの見える化も含めて学部進学という具体的な数字、メールにも書いた内容では、魅力がないと言いつつしまいましたけれども、先ほどの例えば修士論文の質を高めていくとか、今の松本先生がいわれたような観点をもう少し積極的に活用して、ゼミ内だけでなく、もしくは先ほど榎木先生がいわれたように——島田雅彦先生が精力を込めて学会を組織化して、やっとここ三年、四年の進展ぶりというのか、学会の組織運営の落ちつきというんでしょうか、それまでは審査するにしても何だったのみたいなものもあれば、発表するゼミと発表しないゼミなんかで、先生方のかかわり方の濃淡があったりとか、第一期の学会から始めて、「異文化」もそうですが、法政の中で国際文化とか新しい学部が少しでも何かやっているんだとみせるために、学会も手持ちの学会をもち、雑誌も手持ちの雑誌をもちということを川村湊先生さんも含めてやってきて、だけど、当然その温度差やいろんな形の中で、島田さんの組織力というか人望の中でやっと学会が定着していく。その中で学部生と

大学院生等の中での関係性を、二つ目、三つ目は教員側からのあれだったんですけど、学部生の立場からみたときに、大学院ってどう魅力的に写るのかしらという問題と、学生がいたらもつとよかったし、佐々木先生からのご提案で、学部卒の大学院生の座談会も別口で設けたかったんですが、学部生がなぜ大学院に行こうと思ったのか。

今回、外側の資料としておつけした進学者の名簿の中で、出口調査が完璧ではないんですけども、学部生から大学院に来た子たち、いろんな形の子がいて、出てきた先もいろんな形があったりする、もしくは中には二、三、修士をとらないで出ていった子もいたりする。それなりの夢や希望があったのかどうかかわかりませんが、実益を求めて、いろんな形で学部から大学院に進学した子たちもいながら、そうした先輩を使えなかったのもちよつと残念に思いながら、まだこれから学部生から大学院に上がってくる学生たちが、また自分の後輩を巻き込んでいけたら、もう少し大学院の中も変わるのか、そして学部の中に大学院というキーワードがふえてくるのかと思う。学部進学率、もしくは学部生に対する魅力を先生方からご意見を伺うと同時に、もう一つは、大学院だけでなく、留学生の急増、単純に中国人の方といつちやつたほうが正直大きいのかもしれないけれども、そうした方たちに対して、学部も留学生——私も留学生の書類を読んでいるときに、正直いつて中国人の方が多いいわけです。それが必ずしも学部に入るかどうかはまた別ですけども、そうしたことの中で、大学院と学部の連携を強化するためにどうしたらいいのかなという案を出してくださいというよりも、悩みを出してもらっても構わないかなと思ったりもしています。

榎木 多分みえていると思うけどな。

森村 そのことをちよつと先生方からお話しただきたいと思います。榎木先生からせつかく……。

榎木 四つ目の点？

森村 四つ目の点というよりも、連携強化という点がこの企画の本当のポイントなので。

榎木 冒頭での「もつと見たい、見せてほしい」という双方向性のつながり方になると思うんですね。一般的ではないにしても、制度的に、例えば先取りの授業科目があってもいいし、限りがある資源を使うことを考えると、制度的にできることはまだいろいろあると思うんです。

大学院をもっている先生方が、ご自分ももっている学部のゼミの中で吸い上げるといのが今のパターンかなと思うんです。それ

を大事にしつつ、より制度的にゼミの枠を超えた学生たちへのアウトリーチをどのくらいできるか。

佐々木　そこが本当に重要じゃないかなと私は思っています。

森村　先ほど松本先生のお話もそうなんですけど、森村ゼミ、松本ゼミ、佐々木ゼミ、奥石ゼミを超えちゃった子たちになかなか届かないんです。そこは大学院をもっている先生方ではだめなところ。逆に学部の先生から、こんな先生はこういうことをやっているんだから、松本先生のところに聞きに行きなよみたいな話をしていただかないといけないのかなと思ったりするんです。

榎木　そのためには、何をなさっているのかということを含めての教員に共有されるような形にするといいのかなと。

森村　どうしたらいいんでしょうかね。ことは竹内晶子先生が授業参観を随分されて、強制的ではないけれども、ほかの先生方の授業をなるべくのぞきに行くようにというのも、ゼミをのぞいていいといっている先生もいるし、授業もあるかもしれない。この学部ができたときに、一期生の子たちが卒業する瞬間に今でも忘れない言葉があつて、うちらインターカルチャーコミュニケーションに入つただけけど、一番最初にやらなきゃいけないのは教員間でしょうと。結局十年たつても、十五年たつても、それがどこまで達成されているのかしらというのが正直あるんです。

教員の自分自身の専門なり、自分自身の科目の中ではきちんとされているかもしれないけれども、ではこの先生の授業をのぞきに行きたいとか、この先生の授業に遊びに行つて一緒に、例えばいつとき、島田ゼミと鈴木晶ゼミが合体して、合宿して、湘南の海辺で島田先生のおろした魚で飯を食うというのをやっていて……

榎木　今でもそういうのはちょこちょこありますね。

森村　そういう教員間同士、ゼミ間同士とか授業内観察じゃないけれども、そのような形で先生が何をしているのかというのが、お互いどこまで情報共有されているのかというのと同時に、学生たちに、よし向こうに行つてこい、レンタル移籍でもいいから覗きたいな話じゃないけれども……

榎木　事務方には余り聞かれないほうがいいのかもしれない、サブゼミということ、Aというゼミに属してはいるけれども、Bというゼミも聴講してという学生たちもいましたし、一回合同でやりましたよね。学生たちは喜んで……。

佐々木　合同ゼミはやりましたね。でも、サブゼミみたいな形でも所属しているんですね。

榎木 随分前だけど、他のゼミから「聴講」というかたちで三人来てくれたり、四人来てくれたりとか。

森村 松本先生、続けて何か。

松本 一つは、届いていない学生の存在を確認したいところはあつて、正直、卒論を書いていない学生は大学院に来られないですよ。大前提です。

森村 制度的にそうですね。

松本 ですから、どんなに学部で広めても、そもそも卒論を書かせていないところから吸収することが難しくくて……

榎木 つまり、表象系の作品系は無理だろうと。

松本 我々はそういうものを修士のあれにはしてないので、それは現実的にはかなり難しいことだと思ふんです。連携という意味からいったら、やっぱり方法はちよつと考える必要があると思います。もう少しいえば、我々の連携という場合のターゲットは、具体的にどこなんだろうかということ。それは学生なんだろうか、教員なんだろうか。

今度は鶏と卵で、卒論を書いていなければ来られないよねという話がある一方、大学院を考えていたら卒論は書いたほうがいいよねという発想が生まれるかどうかなわけです。つまり、卒論を書くか書かないかの判断基準の中にその先がなかった場合、その先を考えると、卒論を書いたほうがいいんだと思ふ。

ここはすごい細かい話で、実務的には三つのポリシーの見直しとかがなかったら今年度やりたかったことですが、それって四年になるころだと思ふんです。つまり、三年を一年ぐらいやつていて、四年のときにそう思ったときに、例えば所属しているゼミで、さすがに一年で卒論を書けないような状態であったり、あるいは悩んでいるようなときに、さつきちらつといった、議論になっている実質的な五年制ですよ。つまり、学部の四年のときに履修する科目が少ないわけですから、そこで先取りをして、M1のときに修士論文が書けるような状態をつくることによって、後から気づいた学生がどうにかトラックにうまく入れるような仕組みをつくれば、今、卒論を書く予定がなくても、そのように思ったらこういうトラックがあるよというものを示すと、もう少し広くいっても、皆さんに選択の幅が広がってくると思うので、一つ具体的に制度をつくるというのは、私、研究科長になったときに、最初に榎木先生相談したきり日常の雑務の中で埋もれているんですけど、そういう制度を少し設けてみるというのは、新たに何か……

榎木 相談されたっけ。

松本 ええ。

榎木 いつ。

松本 私があったときですんで、五月ぐらいです。

榎木 どこで。

松本 立ち話です。

榎木 廊下で？

松本 ええ。

榎木 それ、相談っていわないよ(笑い)。

松本 いやいや、今度合同でやりたいんですと。要するに、こっちの教授会に私が来るような形で。ですから、読んでいただくと思われるんですが、今回の我々の研究会のアドミッションポリシーに、学部の学生をとれるということを入れ込んだんです。

榎木 一つ質問してもいいですか。学生へのアピールポイントということで、今お話を伺っていて、就職状況がかなりいいというような。国際文化研究科はやっぱりそうなんですか。

松本 どうか、全国的にみて。

榎木 それはちよつと一般論化し過ぎて、文学系は相応に厳しいと思うんです。だから、余り一般化できませんが、少なくとも国際文化研究科でしたら……

松本 普通の就職先に行きますよね。

佐々木 やっぱり修士がないところとは……

松本 逆にいうとね。

榎木 分野によってはそうなんです。ありがとうございます。

松本 なので、具体的にはそういう先取りと早期修了という二つを合わせることによって、五年といってしまうといういろいろ問題が起きま

すが、その二つの組み合わせによる実質五年で修士号をとる仕組みというのは、一つは、三年から四年にかけて悩んでいる学生たちに新しいオプションをみせるという点では意味があるかなと思います。そうすると、ターゲットを広げられるかな。つまり、ゼミで卒論を余りやっていなかったとしても、あるいは表象系であっても、もしそのように考え始めたら、こういうトラックがあるよということも先生も相談ができるような状態をつくる。今のままだと、そのトラックがない分、そこに余り現実的な可能性がないと思います。

あとは、修士の学生と学部学生の交流がゼミ単位にとどまっている理由は幾つかあると思うんですが、一つは、修士の学生にとってのメリットは何か、特に留学生にとって。そうすると、逆に今度は学部の側にメリットがあるはずで、つまり、学部は留学生がなかなかふえなくてという課題をもっているわけです。例えば、私の多民族共生論みたいな授業をやっていると、中国でもウイグルの人が来て、他研究科のモンゴルの人が来て、ウイグルにいる漢族がいて、同じ中国人でもさまざまなバックグラウンドをもって、今度は朝鮮族の人が受けていますけど、いろんな人がいるわけなので、そういうのは財産だと思うんです。その人がいることによって得るものは大きくて、それは院生にとっても、学部生にとっても、そこが交流することの価値を見出すことによつて、今の段階での留学生が余り多くないような状態の学部において何かプラスの影響があるとかというのも考えてみたらいいんじゃないか。もちろん学部のESOPに來ている交換留学生との交流会とか、そういうことは土台としてはありますけど、そういうことも考えられるのかなと思います。

もう一つ、大学院をよく知らないという前提で話をすれば、私はやっぱり指導教員で選ぶものだという意識が強いです。これはいろんな意見の人がいると思いますが、大学院からはこの先生のもとで学びたいとか、この先生のもとで修士論文をやってみたいというのはいすごいあると思うので、またもとに戻っちゃいますが、学部のレベルと院のレベルで、学部のほうが高くなるといわれている一般の傾向の中で、学部は偏差値化されている部分が結構強いんですけど、大学院もそれで余り考え過ぎないほうがいい。例えば、東京大学に行けば本当にいい大学院教育を受けられるかというのと、正直、実は学生はほったらかしにされていて、余りちゃんと面倒をみられない研究科も結構あります。ですから、学部のとときの大学選びと大学院のとときの研究選びを同じに考えないということがすごい大事だと思うんです。

ですから、学部のとくに信頼できる指導教員の先生がいるというのは結構大きいことだと思つので、そこは学部生の人たちには、大学院に行くときまで余り序列化された大学名で物を考え過ぎないほうがいい。もちろん就職面での影響はあるかもしれませんが、学部のとくほどこを第一に考えないほうがいいんじゃないかというのはあります。それはちよつと余談かもしれませんが。

佐々木 今の余談のところで、ちよつとキャリアデザイン学部の筒井先生が最近「大学選びより一〇〇倍大切なこと」という本を出しています。どの先生のゼミに行くかというのは、大学受験の大学を選ぶよりも一〇〇倍重要なんだと書かれています。読んでみたら、本当にそうなんだと説得させられちよつと、これ、学生に読ませようと思つて、貸してあげようかなと思つていたので、同じことをいつていたなど。

森村 ありがとうございます。興石先生、お願いします。

興石 これは悩みになりますが、一時学部のゼミが成立しないということがありました。幸い今は成立していますが、英語を読んでもらおうとする学生の抵抗にあつてしまうことがあるそうです。SAへ行つて帰つてきたばかりなのに英語に向き合おうとしないのです。もうちよつとこんなものを読んだらと課題を与えますと、学生からは、先生は私たちがやっているとところへ急に来て、難しいことばかりを要求すると言われてしまうんです。

大学院にしても、僕自身、対照言語学とかそういうテーマにすべきだと思つて、シラバスを用意するわけです。ところが、そうすると学生が全く来ない。結局教員採用試験合格を第一だと考えるなら、院生が多いその勉強をしようかということもちよつと考えちよつとわけです。

これは意識改革なのかもしれないけど、SAの後、学部で読んで書くことへの興味を持続できずに、思い出になつてしまうということは何とか防ぎたいということです。SAも大学院を考えると、どういう形で利用するのかというのは、僕自身、まだまだ悩みが大きいです。

また、大学院の科目の方向性をいくつかの領域に特化するということは考えられないか、ということですが。実は大学院の科目にはかなり履修に偏りがある。授業はどういったところが成立しているかというところ、浅川さんの心理学とか、中国の曾さんのところとか、あと高柳さんがあるのか、その辺に固定していて、実際、言語文化というところ、よく考えてみると、川村さんのところぐらいしか成立

していないのではないか。

そういうことからみると、将来を考える上で、うちは学部が四つコースがありますけど、そのうち表象がなくて、三つが大学院です。その中で方向性みたいなものがあるような形で考えていったほうがいいのか。例えば、対照言語学みたいなものはやめにして、英語の書き方といった授業にした方がいんじゃないかと考えることさえ僕にはあります。

以下、学部は読みとか書きを鍛えていく方向にもっていくかどうかといったところ。あと一つは、大学院の方向性を明示して、それに特化していく可能性を考えてもいいんじゃないかと思うという点です。ただ、二点目はうちのよさをそぐことでもあるのかなという思いはありますけどね。

森村 どうなんでしょうね。私は大学院で情報系の分野に配分されています。学部でも情報系のほうに入っていますけど。

榎木 ごめん、今度依頼することがあるんだ。

森村 えっ、余り仕事ふやさないで（笑い）。

榎木 いやいや、森村さんじゃなくて。

森村 なぜか学部生の中にもある情報危機感みたいなもの、もしくは情報系、コンピュータという図式が切り離されていないというのか、プログラムだとか、そういった個別の問題はある。これは別企画で大嶋先生と対談する予定にはなっているんですけど、情報系をどうするかという問題が結構大きな問題になってきていて、要するに、情報系の先生方の中では結構緊迫したムードでやっているんです。大学院はもちろんですけども、学部のほうでも私たちのゼミが成立する、しないというところで、際どいところ、

森村 だから、どうしても桁が上がっていかない。ゼロ、1、ゼロ、1で10になればいいんだけども、10になる前にまたゼロに戻っちゃうみたいな、この二進法が位上がりしていかないという現実があつて、私も大学院でも学部でも情報コースで、最初からシラバスを書くところを読まないという子たちが結構いる。これはリアリティーのある話で。

大学院はもつと悲惨で、たまたま私は情報系と名乗っているけれども、いつときまで全部情報空間、名前のあるような哲学系でも情報系にかかわるようなことをやっているが、それをやっても来ない。自分の本筋で哲学を出しても当然来ないんです。つまり、院生が来ないという問題が本当は一番重要な問題の一つにあつて、それは学部との関係でもあるとすると、情報文化問題というのは結

構大きな問題で、だけど、それはそこに特化されているわけではなくて、実はさつき輿石先生がいわれているように、ほかの先生も、ある分野に関しては、言語の先生であろうと、ある種の過密地域と過疎地域が明確に分かれつつあるという現実が学生たちの中になぜかあって、これからゼミ選抜があつたりする時期に入ってくるし、まずゼミの説明会……どうぞ。

佐々木

ゼミ説明会で思いついて、忘れないうちに済みません。

一つの提案なんですけど、ゼミ説明会をやっていると、先生、ゼミの選び方がわかりませんという学生がいて、提案としては、例えば毎日のゼミ説明会のお昼休みか何かに、「ゼミ選びのコツ」とか学生も動員しながら、先生がちょっと出て行ってお話をしたりとか。ゼミって一体何なのか、何を勉強する場なのか、何をするのか、どういう視点でゼミを選びをしいのか、そこがつまりいたりすると、なかなか大学院まで行き着かない……

榎木

今年度やりました。去年、本当に痛切に——前々から感じてはいたんだけど、結局ゼミの選び方がわかっていない、シラバスすら読んでこないという学生がいるようだと聞いて、今年度は、二年生ガイダンスのときに、四つのコースとそれぞれのゼミの関係と、ゼミの選び方について、ほんの少しですけれども、時間を設けて説明しました。ただ、そのタイミングが大事で、四月にやってもなかなかそれを覚えておいてもらえない。ゼミの選び方自体を学生たちがなかなかわかってくれないというのは課題として来年度引き継ぎます。

佐々木

ちょっと前までは、学生たち主体でゼミ冊子とかをつくってくれていて、そういうのも参考に——それが参考になるかどうかかわらないんだけど、教員もかわる形で、ゼミって三、四年の学びでどういうものなのか、どういった学びをしていきたいのかとか、そういったことを今の学生は教えてあげないと、あの子、ゼミに入ったけど、やめちゃったんだってとか、いろいろ聞くんですよ。それはもったいない話なので、大学院も含めてそこら辺もあれば、ゼミを頑張ったら、その上にも大学院というのがあってねという話もそこですと、では卒論を書いておいたほうがいいかなとか……

榎木

それが演習・卒研の委員会がいろいろと考えてくれるところだったんです。

佐々木

今、演習説明会といったんで、そこら辺もてこ入れすることで大学院にもつながってくるというのはあるかなと、ふと思いました。

森村

先ほどの松本先生のお話にあつたように、卒論を書かないと院試を受けられないみたいな話が前提だとすると、卒論を課していな

いゼミが結構ある。それがある程度学生を集めるゼミだったりする場合もあったりして、卒論を書かないから入りやすいというか、行きやすいというので、その部分、何を楽だと考えるかわからないけれども、それが逆に足かせ、手かせになっているとすると、なかなかその先にある院までとか、この先勉強を続けていくとか、勉強とはいわないが、自分のテーマで研究を続けていくというほうにモチベーションが向かなくなっちゃうかもしれない。

卒論を書いて完了しない限り、ある意味でいうと、私のいた文学部なんてやることない。必修科目はあるけれども、結局、自分のテーマで卒論を書かなきゃいけないし、自学自習しかないみたいな話の中で生きてきた人間としてみれば、大学はそのためにあるんじゃないのかと思っていた。大学なんて卒論とゼミありきで生きてきたので、それ以外は何をとったって同じでしょうと学部時代は思っていたから。

その中で、学生たちが卒論を足かせだと思ってしまう文化というか、先ほど冗談みたいにいつたけれども、森村ゼミは、俺がいつも尻をはたいて、「虎の穴」みたいな形で修行させているとか、訓練しているみたいな話になっちゃっている部分がある、もう一つの問題として、先ほどのゼミ説明会の時期という問題にちよつと話を戻すと、一期生のゼミ説明会はS Aの直前、夏休みに入る直前の試験期間が終わった七月二十日ぐらいにやつて、早いのは八月の頭からS Aに出ちゃうので、とにかくそれに間に合わせるんだといって、スカイホールに旗立てて、例えば二十分説明したら五分休憩で、企業の合同説明会みたいな形にして、大広間に長テーブルを二本ぐらい置いて、先生がずっと待機して、「森村ゼミ」という紙のあれを立てて……

佐々木　　今も学生主導でやっていますよ。

森　村　　それに教員が全部入って、ゼミは必修だったもんだから、必ずゼミに入らなきゃいけない。希望のところに行つて、次の説明会までそこで並んでいたりして、終わるとまたメンバーチェンジして、それがどこまで有効だったかはわからないけれども。S Aから帰ってきてからじゃないと、S A頭になっちゃつていて、もうゼミなんか行っている間に忘れちゃうからという話になっていた。

佐々木　　ゼミ説のときに、ゼミの選び方みたいなのは、個人の教員で教えると五分ぐらいしかとれなくて、あの子たちはどこへ行っちゃったんだろうと思つたりとか、すごく毎年していたので、何かヒントになるようなのをゼミ説の時間、お昼休みでもあれば、ちよつと違うかなという気がしました。

榎木 説明会の時期に選び方もということですね。

佐々木 うちのゼミ説にちよろちよると来るような子たちの一部は、先生、ゼミ選びがわかんないみたいな感じなんです。でも、その子たちにとつても大事なことなので。

榎木 どう花開くかわからないからね。

佐々木 そうなんですよ、そこなんです。そこにかけていいとか、卒論を書く気もなかった子たちを何とか四年間かけて、書かせる。そういう子たちのためにも、どこかでゼミ選びはねというのがちよつともあると助かるかなという気がします。

森村 せつかく入ってドロップしちゃう子が結構いるじゃないですか。あれはもったいないんで、秋から再募集欲しいと。実は落ち穂拾いもしたいと思っていて。ゼミは通年なんだけれども、たまに夏合宿して九月のときはやめますという子がいるんですよ。うちのゼミに来ないかと声をかけたいぐらいですよ。だから、年二回ぐらい募集してもいいんじゃないかと。

榎木 でも、前は後期から単位なしで来て、四年のときに選抜を受けたという学生はいますよね。

森村 それを常に半期で募集しちゃういけないのか。四年の後期に来てもらっても困るけれども、三年の後期にゼミの再募集をして、もしくは前期にゼミに入つてもしよつとないと思っただけ、ゼミの話を聞いている友達がいる。

佐々木 それ、よく聞きます。

森村 よかったという子がいるから、一年半でもいいから……

佐々木 しかもゼミ選抜を知らなかったという……

森村 そう、いるんですよ。

佐々木 免許をとり合宿へ行っていて知らなかったとか、みんながゼミをやっている、ああ、失敗したという子はいるんですよ。それは結構聞きます。

森村 それをもう少し救済すると、もしかしたら、みんなが行くから行っちゃった、合格しちゃった。入ったけれども、何か違うといっているうちにフェードアウトして、ぼろつと抜けちゃって、九月からゼミなしでみたいな。そうすると、やつぱりゼミにいたほうがよかったなという子たちが、また自分のことを見直したときに、ではもう一つ別のゼミで頑張ってみようかな、そこにもう一回何かチャ

ンスがあるように、制度的に可能であれば、さっきいった春休みでぼけぼけのやつが、ちょっとは後期から救われるとか、そういう措置の中で勉強に目覚めて、四年になったら卒論を一年で書いていくぞ、三年後期からもう少し頑張ってみるぞというのがそこで少し火がついて、スロースタートかもしれないけれども、勉強のおもしろさだとか、本読む楽しさだとか、物を書いて人に発表する苦労とかをもう少しやって、大学院につながるような子が少しでも出てくるといいのかなという感じですかね。はい、どうぞ。

興石 SAでアカデミックコースに行くようなコースも必要なんじゃないかと、僕は思っています。今はできるとは聞いているけれども、プラスアルファでお金が必要だったりして、前に調べたときは、アカデミックコースに行く学生は結局ほとんどいないという感じでした。というのは、SAというと、コミュニティポイントという点に関心があってしまいがちだけど、例えば向こうの大学で、読み書きを徹底的にやっていいのではないのでしょうか。リーディングリストがあつて、読んで理解した上で自分の考えを書くという、基本的な勉強をやってほしいところがあるんです。

今度はFDで話すんですけれども、学生がどういう感じで英語を読んでいるかというところ、わからない単語の下に日本語の訳を書いて、じつとみて、そこから上ってくる物語をつくっています（笑い）。そんなぬうつと上がってくるような読みじゃなくて、ルールを説いて文法的に分析してあげると、かえって新しいといつて喜ぶんですよ。だから、えっと思っちゃうことがある。SAに行つていて、かえつて大丈夫なのかなという気がたまにしちゃうのはそういうわけです。本当はその辺も鍛えるようなことをやってきてほしいんですけども、そこにはなかなか行かないようですよ。

榎木 英語教育、済みませんという感じ。

興石 自分でそう思つて、何とかしないとイケないと思つているんですけど、そんなことを思つちゃうんですよ。

森村 でも、やっぱりSAももう少し……

松本 だんだん学部教育の話になっちゃう。

森村 大丈夫です。結局は学部教育の基礎がないと大学院に行つても伸びない部分もあるので、学部できちんと——何をきちんといえ、ばいいのかわからないけれども、何かいろいろなきっかけがあるはずなのに、どうしてこんなに外していくんだらうぐらいに外していく子たちが多いので、いつでもそこにひつかかればいいのに、そんなにひつかからないでうまく四年間過ごせるほうが私には不思議

議ではない。だから、こんなにいっぱいひっかかる先生がいて、ひっかかる授業があつて、どうしてそれにひっかからないで、彼らのいう楽なというのか、それがよくわからない。

そういう中でさっきのS Aの話もそうなんですけれども、S Aで英語圏に行つて、英語の授業で英語のテキストを読もうねという、何で英語はもういいですということになつちやうのかがよくわからない。何のために金をかけて行つて、英語が嫌いになつて帰つてくるなら行かなくやいいじゃないかと思ふんだけど。

そうした学部が大学院の悩みになり、大学院の悩みが学部の悩みになつていく。結局、連携は悩みの連携になつているかも知れないですけども、その中で何かまだ可能性がありそうだなということが幾つか得られたと私は思つていて、それなりにまだまだ捨てたもんじゃないなど。当然なんですけれども、見たい、見せていただきたいという榎木先生のニーズと、見せられるだけのものを大学院教育として指定、もしくは修士として修士論文がある程度みせられるのか。例えば、修士論文は修士をとつたA評価の子たちを冊子につくつていますよね。

松本 デポジトリー。

森村 それをもつと学部生にも、こういう研究を大学院でやっている子たちが修士をとつて出ていつているんだよと。皆さんの卒業生や仲間たちや留学生たちは、こういう研究をして国際文化にいるんだと。今度は、逆に卒論はどういうことをしているのか。卒論の題目一覧表を佐々木先生がやられていましたけれども。

佐々木 あれは、本当は将来的には一歩ずつ……

森村 載せたいところですよ。

佐々木 許可がとれたものだけでも、要旨、そしてリンクで飛ばしていきたい。

森村 ですよ。そうやっていつでも研究成果が公開されて、みられて、この研究はこういう先輩もやっていったんだということがつながれていく中で、ほかのゼミでもこういうことをやっているんだとかということがあれば、学部の先生でも、ゼミを出したけれども、院のこの先生とならリンクを張れるみたいな話で、研究の継続が別の形でできるようになれば、ゼミ選びは先生選びだが、テーマから先生にアプローチするというのもありだろうと。多重にネットワークがあれば、その先生が直でなくても、先生のお知り合いの大学

院の先生がそちらに推薦するなり、紹介するなりという手もあったりすれば、学びのネットはもう少し濃密になるのかなという気もちよつとして……

松 本 この間、鈴木靖先生が提案していたAプラスの卒業論文を公開できないかというのがあったよね。

佐々木 本人の許可ととつてということだと思っんですけど。

松 本 あれ、デポジトリーに載せられるような統一した様式は大学院にもあるんだよね。

佐々木 載せてあげたいなという気はする。

森 村 それは載せたいですね。それこそ頑張つてゼミを一年間、二年間、もしかしたら三年間やってきたことの成果があるはずで、こんなことをやっているんだよということ、その辺をもう少しみんなに公表できたらいいなと思いました。

時間を随分延長してしまつて、先生方のお時間をとつていただきまして申しわけございませんでした。まだまだ議論は尽きないし、いろんなテーマに波及していきそうなどころだったんですけども、私の個人的な用がありますので、これにて終了させていただきますと思います。どうもありがとうございます。

(二〇一七年一月二十七日・国際文化学部長室にて)